

他者との関わりにおけるアイデンティティ —日本と台湾をルーツに持つ若者のライフストーリー—

青木 香代子*

(2021年11月8日受理)

The Construction of Identity Through Interaction with Other People: A Life Story of a Youth with Japanese and Taiwanese Background

Kayoko AOKI*

(Received November 8, 2021)

Abstract

In this article, the author investigated how one's identity is constructed through language learning and interactions with other people in different environments utilizing a life story interview of a youth whose parents are Japanese and Taiwanese. She was born and raised in Taiwan and went to a Japanese elementary and junior high school in Taiwan, later to a Taiwanese high school and then to a Japanese university in Japan. The research showed that she has mainly taken a position of silence by not telling her background as a sign of resistance or a strategy of communication depending on the situation.

【キーワード】 アイデンティティ、日台「ダブル」、台湾、ライフストーリー

1. はじめに

本稿は、台湾¹⁾で生まれ育ち、日本の大学に進学した日本と台湾をルーツに持つ若者のライフストーリーから、ことばの習得過程における葛藤と、日本や台湾などにおける他者との関わりの中で形成されるアイデンティティに焦点をあてて考察することを目的とする。近年、日本の大学で学ぶ多様な背景をもつ学生数はますます増えてきている。このような学生の背景は、「帰国子女」と呼ばれる海外の教育機関で教育を受けた場合に限らず、両親の一方が日本国籍である、いわゆる「ハーフ」の学生、幼少期または学齢期に来日した外国籍の学生、あるいは日本育ちであるにもかかわらず外国籍であるために大学の登録上は「留学生」として扱われているケースなど、さまざまである。しかし、一旦入学してしまえば、「日本人学生」か「留学生」として扱われてしまうことが多いのではないだろうか。本稿で取り上げるユカ（仮名）の場合、日本国籍を持ち、日本名を使

*茨城大学全学教育機構

用しており、帰国生入試を利用して入学したため、「日本人学生」という扱いであるものの、「帰国子女」として友人から見られることもあった。このような多様な背景を持つ学生は、「日本人学生」と「留学生」というくくりの中で、際立つというよりはむしろ埋もれてしまっている場合が多いのではないだろうか。そこで本稿では、日本と台湾をルーツに持つ若者のライフストーリー・インタビューから、それぞれの場面における他者との関わりの中で、どのようにアイデンティティが形成され、どのような戦略が取られたかを探ることとする。

2. 先行研究の検討と本研究の位置づけ

日本と台湾をルーツに持つ若者のライフストーリーを取り上げるにあたり、まず、複数のルーツを持つ人々の呼称について検討する。両親の国籍が異なる人々の呼称は、様々に変化してきているが、ここではそれらの呼称を俯瞰し、本研究の対象となるユカの呼称について検討する。次に、複数のルーツを持つ人のアイデンティティに関して、国際児、移動する子ども、ダブル、帰国子女のアイデンティティに関する先行研究を検討する。最後に、台湾の日本人学校に通ったユカの経験を考察するため、台湾の日本人学校における教育事情とそこで学ぶ国際結婚家庭の子どもがどのように扱われてきたかについて検討する。

2.1. 「名づけ」からこぼれる呼称

国籍や民族など、複数のルーツを持つ人々の呼び名は、多様に変化してきた。歴史的には「混血児」や「あいのこ」などがあるが、現在はこれらの呼び名は差別的であるとして使われることはない(岡村, 2016)。近年では「国際児」「外国にルーツを持つ子ども」「海外にルーツを持つ子ども」「移動する子ども」「ハーフ」「ダブル」「ミックスルーツ」などがあるが、対象とされる人々の呼び名をめぐる議論は、岡村によれば、「いまだに決着したとはいいがたく、それは決着する見通しもない」(岡村, 2016: 56)。異文化間教育では、両親の国籍・民族アイデンティティが異なる男女の間に生まれた子どもを「国際児」(鈴木, 2011)と呼ぶ。一方で、言語教育においては空間、言語間、言語教育カテゴリー間を移動しながら成長した子どもを「移動する子ども」(川上, 2013)と呼ぶ。「ダブル」という呼称については、一部で差別的とされている「ハーフ」に代わる呼称として用いられてきているが、岡村(2016)によれば、主に在日朝鮮人研究で用いられることが多いとされる。また、「ハーフ」と呼ばれる人々自身が自己認識の一部として取り入れている場合や、「ハーフ」という言葉に含まれる問題性を認識しつつあえて用いる場合もある(岡村, 2016)。

本稿のケースのユカは、日本人の父と台湾人の母を持ち、中学まで台湾の日本人学校、その後現地の高校に通ったのち、日本の大学に進学した。このような場合、異文化間教育で用いる「国際児」(青年期以降の場合を示す場合も含まれる)が妥当であると考えられるが、文字の印象から「国際児」は青年期以降を指すイメージが薄い。また、すでに述べたように日本国籍で日本名を使っているユカは、大学からも周囲の友人からも「日本人」と思われており、本人が言わない限り彼女のアイデンティティや背景は不可視である。そのため、本稿では年齢をイメージさせず、日本において「見えにくい」存在として主に日本と朝鮮半島をルーツに持つ人々に対して用いられてきた「ダブル」(あるいは日台「ダブル」)を使用することとする。しかし、ユカ本人は一般的によく使用されている「ハーフ」ということばを使用しているため、インタビューにおいて使用した「ハーフ」についてはそのまま引用することとする。

一方、ユカには違う呼び方もあてはめることができる。ユカが日本人学校に通っていた経験もあ

ることから、渡日するまでは「海外子女」、渡日以降は「帰国子女」と呼ばれることになる。しかし、この呼び方にも疑問符がつく。ユカは台湾生まれであり、日本に「帰国」したわけではないからである。また「帰国子女」とされる子どもは、両親とも日本人であることが前提となる場合がほとんどであり、海外滞在年数やホスト国での教育環境が「帰国後」の経験に与える影響や教育戦略などについて研究の焦点が当てられるため、ユカのケースは当たらない部分もある（例えばビアルケ、2006；佐藤、2001；渋谷、2000）。台湾出身で日本にルーツを持ち、日本に「移動」して暮らす人たちは一定程度いると考えられるものの、このようなケースの研究はほとんど見られない。本研究はそのような特定の呼称を持たないケースの一つであるといえる。

2.2. 複数のルーツを持つ者のアイデンティティ

エリクソン（2011;1959：96）によれば、アイデンティティは「自分自身の内部の斉一性と連続性が他人にとってその人が持つ意味の斉一性と連続性と調和するという確信から発生する」としている。加えてポーキングホーン（Polkinghorne, 1998）は、アイデンティティは他者との関係の中で構築されていくとする。さらにホール（Hall, 1996）は、アイデンティティは（自分が）「誰であるか」「どこから来たか」というよりもむしろ「誰になるか」「どのように表象されてきたか」であり、そのプロセスにおいて歴史、言語、文化の資源を（どのように）使用するかを問題とする（Hall, 1996:4）。これらのアイデンティティの理論から、アイデンティティはその人本人が自分が誰であるかの認識だけでなく、他者と自分との関係や他者が自分をどう捉えているかがアイデンティティに影響するといえる。

さらに構築主義的な視点からエリクソンのアイデンティティ論を分析した坂本（2005：181）は、社会におけるアイデンティティ形成について、カテゴリーに基づく権力関係のなかでマジョリティ／マイノリティのアイデンティティが規定されるとし、「マイノリティの周縁的アイデンティティは、あらかじめ存在するものではなく、自明で普遍的なアイデンティティ、すなわちマジョリティのアイデンティティとの関係で、有徴化され、異質な存在と規定されることによって生ずるものである」と述べている。また、マイノリティがマジョリティのアイデンティティに「同一化したまま、過ごすことができる場合には、マイノリティと呼ばれるカテゴリーに帰属していたとしても、支配的アイデンティティを持つ場合がありうる」が、「自らがマジョリティに属さないことに気づかされる」状況にいたることも多い（坂本、2005：180）。日本社会においては、日本生まれ・日本育ちで、両親ともに日本国籍であり、日本語を母語とし、日本の学校で教育を受けた「マジョリティの日本人」のアイデンティティは無徴化されている。複数のルーツを持つ人が「マジョリティの日本人」に同化する場合には彼ら・彼女らのアイデンティティは不可視化されるが、「マジョリティの日本人」との関係によっては異質な存在となることが考えられる。

国際児のアイデンティティの研究を行う鈴木（2011, 2014 など）は、国際児の文化的アイデンティティが形成される主な要因として、①居住地（国）、②両親の国（文化）の組み合わせ、③日本人の親の性別、④国際児の外見的特徴²⁾、⑤家庭環境、⑥学校環境、⑦出生地、年齢、性別などがあるとし、国際児にとって最も自然なのは、「どちらかの文化（国）のアイデンティティをもつかではなく、『国際児としてのアイデンティティ』、すなわち、二つの文化（国）が混合（融合）したアイデンティティを形成することである」（鈴木、2012：79）としている。これは、二つ（あるいはそれ以上）の文化を融合させ包含することを可能にするトランスカルチュラル・アイデンティティ（transcultural identity; Suárez-Orozco, 2004）とも言えるであろう。

一方で、移動する子どものアイデンティティは、複合的に形成される(川上, 2013: 32)。複数の言語間を行き来するなかで、「子どもの言語能力、他者性へのまなざし、さらには親を含む家族と社会との関係性も、子どもの言語に対する意識やアイデンティティ形成に影響する」が、それは子ども自身が自己のあり方を模索するプロセスでもある。他者と関わり、「異質性を生むまなざしに晒される体験」をし、複数の言語世界との接触体験によって、複合的なアイデンティティの形成が進むのである(川上, 2013: 33)。この「異質性」はしかし、必ずしも可視化されているとは限らない。日本名の使用、外見的特徴などにより差異が不可視化されている場合や、日本語能力に大きな問題がない場合、主流社会から見えなくさせられている場合もある。

このような日本の主流社会からは「見えにくい」存在の、複数のルーツを持つ人のアイデンティティに関する研究は極めて少ないが、竹沢(2016: 23)は、日本と朝鮮半島をルーツに持つ「ダブル」のアイデンティティについて、「身体などの『差異』が不可視である場合、主流社会のメンバーに『なりすます』(パッシング)か、あるいは敢えて積極的に名乗ることをしないか、という選択を強いられる」ことになり、「名乗るか名乗らないか、名乗ることが必ずしも有利に転じない社会において、マイノリティ側の出自を明かすことによる偏見や差別に一生立ち向かう覚悟が持てるか否かという決断を下すことになる」と指摘している。「異質性」が不可視の者にとって、誰に対して、どのような場面において名乗るかということもアイデンティティ形成に影響を与えるといえる。

さらにいえば、いわゆる「ハーフ」とされる人々を「人種化された集団」として捉えたとき、多くの場合、「親が欧米系出身の<白人系>で、その遺伝子型が形質として表現された『日本人離れた』容貌(目鼻立ち、スタイル、肌の色など)を有している人」がイメージされやすく、同時に「言語能力や国際性」といった「社会的・文化的にコード化されたステレオタイプと結び付けられる」傾向にある(岩淵, 2014: 13)。そして、国際結婚家庭の子どもの大多数を占め、「表現型の明確な差異が認識されないどちらかの親が東アジア地域出身の人たちがそこに含まれることはあまりない」のである(岩淵, 2014: 13)。岩淵によれば、このような限定的なイメージは「人種化されたステレオタイプ」として、日本社会によって受け入れられやすい特定の差異が強調され、「構造化された不均衡な権力関係」から「特定の紋切り型のイメージへと還元し、本質主義的に規定」することにつながっている。日台「ダブル」は、他の東アジア系のルーツを持つ人と同じように、差異は可視化されず、また支配的な「ハーフ」のイメージからは外されてしまうにもかかわらず、他者との相互行為の場面でひとたび「外国」のルーツが明らかになると、「外国人」化してしまうのである(下地, 2018: 285)。

「帰国子女」のアイデンティティに関する研究の一つに、中学校における帰国子女のエスノグラフィ研究を行った渋谷(2001)の研究がある。渋谷は、「帰国子女」のアイデンティティについて、一つの文化への帰属意識にとらわれないアイデンティティの型を「超文化モデル」と呼んだが、「超文化モデル」は異文化間を往還する者に新たな安定をもたらすものなのか、アイデンティティという概念自体を「神話」にしてしまうものなのかについては検討される必要があるとしている。そして、渋谷による研究では、(帰国子女生徒が)差異を「越え」たり、無化したりするものではなく、折衝を続け、混淆化していくことによって、差異を認め合う「第三の位置取り」が見られたことが報告されている。また、「帰国子女」の中学生は、「一般生」に対して海外での過去(の経験)について沈黙することにより、「一般生」のようになろうとしていた現象が見られた³⁾としている。本研究のケースは台湾出身のダブルの若者であり、ユカが進学した大学には「帰国子女」向けの授

業は設置されておらず、ユカも「帰国子女」が集まる団体などには属していないが、渋谷の研究は、「帰国子女」とされる大学生のアイデンティティ形成にも示唆を与えている。

2.3. 台湾の日本人学校における日台「ダブル」の教育

現在海外に設置されている全日制の日本人学校は、戦後、海外で生活する日本国籍を持つ子どもたちが教育を受ける場として1950年代に始まり、1960年代以降は日本政府の援助を受け整備されていった（佐藤，2010）。台湾には日本人学校が3校あり、うち1校は他の日本人学校より早い1947年に設置されている。台湾の日本人学校の現状と課題について研究した土肥（2010）の調査によれば、2010年の時点で国際結婚家庭の児童生徒は少ないところでも30%、多いところでは49%に上り、日本語能力が十分でない児童生徒も含まれたことが報告されている。調査によれば、国際児の割合は増加傾向にあり、現地採用の進路指導の教員が採用されたこともあり、中等部卒業後は現地の高校に進学する生徒も多くなってきている（土肥，2010；齊藤，2010）。

日本人学校における「日本人」と「現地の人」の関係に目を向けると、日本人学校では、「日本人」が国家という枠組みに規定され、「現地」や「現地の人」が他者化されてきたことにより、「日本人」の優位性が作り上げられてきたとの指摘もある（佐藤，2010）。このことは、東京学芸大学国際教育センターが発行してきた『在外教育施設における指導実践記録』における台湾の日本人学校に関する記述を分析した齊藤（2010）の研究においても同様の結果がみられた。齊藤（2010：119-120）によれば、台湾の日本人学校には、1970年代後半から国際結婚家庭の子供の記述が登場し、「学力の点で『困難を抱えた』子ども」として認識されていたようであるが、子どもたちの間でも現地の台湾人や台湾製の製品に対して軽蔑的な表現や日本を基準にして評価したり、「中国籍」（当時）の子どもに対して『『台湾人』や『日人』（にんじん、半分日本人という意味）』という言葉が投げかけたりするケースがあったとする記述を紹介している。しかし80年代中葉からは国際理解教育が取り入れられるようになり、国際結婚家庭の子どもたちに対する目線も「中国語ができる子」としてとらえられ、「国際理解教育の重要なエージェントとして位置づけられて」いったと分析している（齊藤，2010：119-120）。

また上述の土肥（2010：165-166）は、「国際結婚家庭児童生徒（国際児）の比率の増大は、子供たちのアイデンティティ形成問題とも深くかわり、…（略）その海外『日本人』学校の『日本人』とは何なのかを改めて考える視点」、同時に日本人学校における現地理解教育、異文化理解教育、国際理解教育において「より身近な相互啓発の機会を与えるかもしれない『国際性』や『国際人』とは何かを改めて考える視点」も提供しているとする。しかし、齊藤や土肥の研究においては、国際児本人たちの視点は欠けており、むしろ現地理解教育や国際理解教育のリソースとして「日本人」児童生徒、あるいは教師に消費（活用）される立場となっていることは指摘しておかなければならないであろう。また、台湾の現地校に通う国際児の保護者を主な対象として質問紙調査を行った武田（2016）の研究によれば、現地校に通う国際児の継承語（日本語）の教育・保持は難しく、「外国人留学生」や「帰国子女」として日本の大学に進学することが制度の面（日本国籍を保有していれば「外国人留学生入試」は利用できないなど）だけでなく経済的にも改善が必要であることが分かった。武田の研究は、現地校に通う国際児にとって、日本の大学に進学することは必ずしも容易でないことを示している。日台「ダブル」の子どもの教育をとりまく状況は、日本人学校では「日本人」とはみなされない場合があるほか、現地校に通い、継承語の維持ができていない場合には「留学生」にも「帰国子女」にもなれないという複雑な環境であるといえる。

3. 研究方法

本研究では、日台「ダブル」のアイデンティティを取り上げるにあたり、ライフストーリー研究を用いた。ライフストーリー・インタビューでは、語り手は「内的な自己を反省的に振り返り、そのなかにあるさまざまな葛藤を調整し、過去から現在へ至った自己の意味に一貫性をあたえて全体を構成する」とされている(桜井, 2012: 38)。つまり、ライフストーリーを語ることは、「経験を有機的に組織化し、意味づける行為」であり(やまだ, 2007: 125)、同時に聞き手と語り手の「相互行為をとおして構築されるもの」でもある(桜井, 2005: 37)。さらに桜井(2012: 167)は、ライフストーリー研究においては、語り手が情報の提供者であり調査者はその情報を解釈し分析するという「二分法」ではなく、語り手も「調査者とのインタビューの相互作用をとおして、出来事がなぜどのように起きたのかを評価し、それがいかなる意味を持っているのか、登場人物の行為や動機が何かを説明する解釈過程に参加している」とする。そして、自己について語ることは、「自己形成の実践過程の一部」(桜井, 2012: 39)であり、そこで語られる自己とは、「自己物語内の自己との関係であるだけでなく、他者との関係でもある」(桜井, 2012: 43)。

そのため、本研究におけるインタビューにおいては、あらかじめ用意した質問に対する回答の解釈を語り手であるユカに求めたり、聞き手である筆者の解釈を確認したりする場面もあった。本研究は、日台「ダブル」のアイデンティティを一般化しようとするものではなく、ひとりのライフストーリーを通して、語り手が他者との関係の中でどのように自己を物語るのか、また過去の経験がどのように意味づけられているのかをみていくことにより、ことばの習得における葛藤と、他者との関わりとアイデンティティの関係を探ることとしたい。

本稿で取り上げるユカと筆者の関係であるが、ユカが大学1年生の時、A大学で筆者がコーディネーターを務めていた海外研修プログラムに申し込み、コーディネーターと参加学生として出会った。このプログラムでは合わせて2回、異なる場所で海外研修を行うことになっており、ユカはイギリスとマレーシアでの研修に参加した。筆者は当初、ユカが台湾の高校に通っていたということは知っていたが、母親が台湾人であることは後になって知ることになった。

インタビューは、2016年から2018年にかけて、3回(追加の電話インタビューを含めると4回)行った。1回目のインタビューは、マレーシアのB大学に派遣される前の2016年8月に行い、2回目のインタビューは、プログラム終了後の2017年4月に行った。1回目、2回目のインタビューではプログラムでの体験についての質問を含んでいたものの、インタビューの大部分がユカのアイデンティティについての語りであった。そのため、3回目は、1回目と2回目のインタビューで語られたユカのアイデンティティに関わる部分について、追加質問や確認を行い、2018年4月に実施した。電話インタビューは簡単な確認のみで、2018年3月に行った。それぞれのインタビューは約1時間半～3時間弱であった(電話インタビューは約30分)。インタビューはすべて録音し、文字起こしを行ったのち、コード化して分析した。インタビューの分析にあたっては、クレスウェル(2007)による質的研究の分析手順(データの整理、データの読み取り・全体的な印象の書き取り、コード化、テーマの明確化、テーマの分析結果の提示、解釈)を援用し、アイデンティティに関わる語りを抽出し、分析した。

4. 結果と考察

ここでは、ユカの略歴と育った言語環境について述べた後、台湾や日本、マレーシアでの経験を、できごとの順に追っていくこととし、主に教育歴の段階に分け、それぞれの段階におけるアイ

デンティティに関する語りを中心にみていくこととする。ユカの語りにおける引用部分がいつのインタビューであったかは括弧にいれ番号で示し、引用部分の強調は下線で表した。

4.1. ユカの略歴と言語をとりまく環境

先述のように、ユカは日本出身の父と、台湾出身の母を持ち、台湾で生まれた。3人姉妹の2番目である。父親の「日本語を習得してほしい」（インタビュー④）という思いから、小学校・中学校を全日制の日本人学校で過ごした。小学校進学までは日本人が経営する日本語・英語・中国語を使う幼稚園に通っていた。また、ユカの家族が暮らしていたのは現地の台湾人、日本人だけでなく、様々な国の人が暮らす国際的な地域だったようである。学齢期には、日本の小学校に短期間体験入学をしたり、高校進学前にはオーストラリアに3か月間語学留学したりした経験がある。このことから、ユカは経済的にも比較的恵まれた環境で教育を受けることができたといえる。

ユカが育った言語環境はどのような状況だったのだろうか。ユカの家庭では、父と母がそれぞれ違う言語（日本語と中国語）を話しても会話が成立している、という状況で、普段の会話でも、日本語、中国語、台湾語を混ぜて話し、「一文を一つの言語で言い終わることはない」（インタビュー①）という。母方の祖父は客家語、祖母は台湾語を話し、祖母と母は台湾語で話しているのを聞いていたので、ユカは台湾語で「最低限のスピーキングができる」（インタビュー①）。しかし、祖母とユカは日本語と中国語と台湾語を混ぜて話すという。このほかに、ユカが通っていた日本人学校には、英語圏のルーツを持つ「ダブル」の生徒がいたため、その生徒と話す場合には英語も混ぜて話すこともある。このようにユカは多言語・多文化の環境で育った。

インタビュー当時、ユカとユカの姉は日本に住んでいた。姉との会話は中国語が多いが、特に家族の話や昔話は中国語になるという。しかし、学術的なことや、大学のレポートや論文の相談、進路相談は日本語で会話をしているとのことだった。一方ユカの妹は、台湾の現地の小学校に2, 3年通っていたことがあり、妹との会話は「ほとんど中国語」（インタビュー④）で、妹は日本語が難しいときがあるということだった。ユカにとって、小学校に上がるまでの第一言語は中国語であったが、日本人学校に通うようになると、「もう、日本の教育だったので、どんどん日本語が上達していった」（インタビュー①）日本語を話すようになった。高校進学に伴い、台湾の現地校に進むと、中国語が再び第一言語になり、「中国語のほうが、知識量をはるかに日本語を超えていると思う」（インタビュー①）ほど、中国語能力が日本語能力を上回るようになった。しかし日本の大学に進学したいというユカの希望もあり、帰国子女入試を利用して日本のA大学に入学した。インタビュー時、ユカの日本語能力は、日本で教育を受けた学生とほぼ変わらないと感じるほどであったが、会話の途中でポーズ（発言をしない「間」）があったり、書き言葉でも不自然な表現が見られることがあったりした。それについて聞いたところ、間があくのは適当な表現を探しているときであり、書き言葉についても、文章をつくる時には中国語で考えていることがあり、その干渉をうけるために不自然な表現になることがあるということであった。

4.2. 日本人学校（小学校～中学校）－「ハーフ」であることの葛藤

ユカの通っていた日本人学校では、両親とも日本人の生徒だけでなく、ユカのような日台「ダブル」の児童生徒や、その他の背景の「ダブル」の児童生徒もいた。しかし、母親が台湾人であることを話したり、「ハーフ」であることを話すのも嫌だったという（以下、Yはユカ、*は筆者）。

Y : 周りが外国の日本人学校ってということで、ハーフとかいっばいいけど、なんで私は純血じゃないんだろうっていうのは、小学校の頃は思っていて。で、父はいいんですけど、母は学校に来るのも嫌だったんですね。

* : 日本人学校？

Y : 日本人学校にも。友達とかかわるのも嫌がってたし、ハーフなんだよっていうのも、嫌だったんです。ほんとに、日本人だよって言いたくて、その時は。それが中学校まで続いて。
(インタビュー②)

母親が台湾人であることの背景を話したくないと思うようになった経緯について聞くと、日本人学校内の構造を感じ取っていた様子がわかった。

* : その、お母さんに対しての、反発心、反発心だったのかどうか分かんないですけど、そういう思っているのは、どういうところから来てたんですか。

Y : うーん。始まったのは多分、小2、小3くらいからかな。なんだろう、日本人がいて、日本人学校には、もちろん。私はそれじゃないほう。それじゃないほうっていう考えだったので、なんだろう、上下関係がもう、うっすらと生じていて、私は下の方っていう感じ方だったので、だからこの、人に劣る部分を積極的に見せたくないって思いがあって。それは母が来ると、認識せざるを得ない、突き付けられるので。それが負担だったかもしれない。(略) 親が、京都出身とか千葉出身だよっていう話を聞いて、私は？って聞かれたときに、「お父さんは千葉出身」で終わらせてたのを覚えているので。うーん、なんだろう、勝手に優劣をつけてしまったことで、義務教育間は悩んでたのかな…。

(インタビュー③)

ユカが感じていた「上下関係」は、台湾をルーツに持つことを話したくない気持ちにさせ、母親への反発心にもつながっていたことがわかる。また齊藤(2010)の分析に見られた国際児に向けられたまなざしや「日本人」と「台湾人」もしくは「それじゃないほう」の間の構造を、ユカは内面化していたということがうかがえる。

4.3. 台湾現地校（高校）－中国語能力の修得と台湾人生徒との出会い

4.3.1. 中国語が話せないことの葛藤とその克服

高校への進学にあたって、ユカは日本の高校へ進学することを望んでいたが、父親の仕事の都合もあり、台湾の現地高校へ進学することになる。中国語能力について、生活言語は問題なく話せるものの、学習言語の能力が十分でなかったことに加え、朝7時半から夕方5時までの8時間授業、日本人学校では勉強していなかった授業内容については「話す分には話せるんですけど、実際に専門知識があるかっていうと、ないので」(インタビュー①)と、はじめは全く授業についていけなかった。そのため、高校入学当初は「毎日泣いていた」(インタビュー①)という。当時を振り返って、ユカは次のように語った。

Y : 私は、好きでもない高校に行ったじゃないですか。親の強制で。で、まあ、文化が一気に変わって慣れない。しかも、好きじゃない。なんでここに来させられたんだっていう。

親、何考えてるんだらうっていう、すべてに対して憎んでた時期が最初の一学期目はあって。すべてが雑音にしか聞こえなくて。閉じこもってしまったんですけど。(略) 自分は受容しきれてなくて。受容できるだけの心の余裕もなくて。周りを見てみたら、自分と違う環境で育った人たちがばっかで、言えなくて。親なんて、絶対言えない。申し訳なさもあるし。苛立ちもあるし。(インタビュー③)

ほとんど相談できる相手がいなかったというユカは、「ひたすら、お弁当はおいしいものっていう、思いで生きてました、あの時は」(インタビュー③)と振り返る。そして母親もユカの変化には気づいていたようだ。

Y：大学に入ってから聞いた話だと、(当時は)表情がなくなっていくし、どんどん痩せていくので、ウエストがどんどん細くなって。で、学校(から)はでも、話さないって、先生と連絡取ってたのを最近知ったし。お姉ちゃんもいたので、姉の経験からだと思います。いやあ、懐かしい。

*：乗り越えた今は、そう思えますか。

Y：懐かしい。けど、あってよかったなと思う。その経験が。(インタビュー③)

その後、ユカの教師も、ユカが勉強についていけるように昼休みに1対1で勉強を見てくれることになり、放課後の自習時間でも見てくれることになって「少しずつついていけるように」(インタビュー①)になっていった。そして本人の努力もあり、先述のように高校時代には中国語が第一言語になった。そして友人にも恵まれ、「不思議なことに、私が本音を話せるのは、台湾人しかなくて。」(インタビュー③)とし、高校時代に支えてくれた友人とは「帰国したら必ず会って」(インタビュー③)いるという。

4.3.2. 「日本人」としての立場の逆転

台湾の現地校では、日本人の父親を持つという立場に立ったことで「立場が若干逆転した感じ」(インタビュー③)がしたと述べている。台湾人の生徒に日本人として「優れている」側として見られることがあったと語った。

Y：どうせお前ら日本人(だからこんなことしない)だろって発言を聞くこともあったので、高校で。なんか、日本人だけじゃなくて、台湾人も、植民地の思い出が、記憶がまだ残ってるのかなって。植民地かどうか分かりませんが、経済的な差もあるし。世界で見ると、台湾のほうはまだ全然下、発展途上なのでっていうのが、文化として根付いてるのかなって。(インタビュー③)

歴史の授業の時も「台湾のほとんどの歴史が植民地だったから。その時に、日本人だけが悪いんじゃないっていう思いはあった。でも今思ってみれば、いや、日本人が悪いでしょって感じなんですけど」(インタビュー③)とし、当時は日本人の立場に立っていたと振り返っている。台湾人生徒と日台「ダブル」であるユカとの立場の違いについては、インタビューを通して振り返って気づいた様子であった。

4.4. A 大学

4.4.1. 「帰国子女」と呼ばれることへの抵抗

日本の大学（A 大学）に帰国子女入試を利用して入学したユカは、サークルや学生同士のミーティング等の際に、日本語に詰まることがあり、日本人の学生に聞かれることがあった際、自分が「帰国子女」であると話したところ、「ああ、やっぱり」（インタビュー①）という反応だったという。それ以降、ユカは次第に自分の背景を話さなくなっていく。当初帰国子女であることを告げていた背景について、ユカは次のように語っている。

Y：最初は、やっぱ、自分を守るためじゃないですか。私、帰国生だから、期待してもいいけど、日本語力そんなにレベルは高くないし、できないのが当たり前って風に見てくれるよねって保証をかけてたのかもしれないし。やっとな帰国、私が小学校の時に見てきた、日本人の方が帰国するっていうことが自分ができたってということに対しての喜びから、発言を促していたのかもしれない。（インタビュー③）

入学当初は、周りの学生に日本語能力に疑問を持たれたことから、「帰国子女」と名乗ることで「自分を守ろう」としていたことが分かった。しかし、周りの学生が「帰国子女」に対して持っているイメージが、自分とは違うことが分かり、次第に反発を覚えるようになっていった。

Y：なんか、別に帰国子女っていわれるのはいいんですけど、いった後で対応が変わるのが好きじゃなくて。一応、日本人学校で勉強してたし。基礎能力は、さほど（差が）ないと思ってたから。いやむしろ私のほうが年上だし。いろいろ経験しているはずだと思ってたけど。（インタビュー①）

上記の発言では、台湾と日本の学年歴の関係で、高校卒業後すぐに入学した学生よりも1歳年上であることから、日本語に自信がなく「帰国子女」と名乗ったものの、他の学生と比べて学力が劣るわけでもなく年齢では上であると思うように変わっていったことがうかがえる。

Y：大学に入って、（略）帰国子女はいいねっていう人もいれば、帰国子女だから [A 大学] に入れるんでしょとか、なんか、帰国子女だからなにになができるとかっていう、（略）みんなが想像している帰国子女生の像があって、それに当てはめてこようとして、みんな。英語話せるんでしょとか、将来は日本で働かないんでしょみたいなことを言われると、なんかやっぱ、なんだろうな、嫌じゃないんですけど、聞きたくないっていう。（インタビュー②）

そしてユカ自身「自分は帰国子女なのか」ということにも疑問を抱いている。

Y：私、別に帰国したわけでもないですし、って思っちゃうし。むしろ外国人枠のほうが、向いてるんじゃないかなって。（インタビュー②）

入学当初は「やっとな帰国、（…）日本の方が帰国するっていうことが自分ができたっていうこと

に対しての喜び」(インタビュー③)があったが、やはりここでも台湾生まれであり「日本の方」がする「帰国」にあこがれていたものの、それは「帰国」ではなかったことに気づいた語りもしている。

Y：日本に住んだことないし、日本に友達いないし。「帰国」って国に帰るけど、一応国籍は日本だけど、日本知らないし。(インタビュー②)

このような周りの友人に帰国子女として見られることへの抵抗や、そもそも「帰国子女であるのか」という疑問から、あえて「帰国子女」であることや、台湾の学校に通っていたこと、ダブルであるバックグラウンドについては積極的に語らないことにより、帰国子女(や「ハーフ」として見られることを避けていることが分かった。

4.4.2. 日台「ダブル」としてのアイデンティティのゆらぎ

ユカの「積極的に語らない」という姿勢は続いたが、日本で生活していくなかで、台湾で育った日台「ダブル」としてのアイデンティティのゆらぎが見られるようになったことがわかった。

Y：日本に帰ってくるまでは、日本人として思ってたんですけど、実際日本に帰ってきて生活してみると、全然知らないし、むしろまだ1年しか生活してないし、名前は4文字だけど、ずっと思い浮かぶものは全部台湾の文化だし、日本人じゃないのかな、っていう風に思ってきたりはします。(インタビュー①)

ここでは「日本に帰ってくるまで」という表現を使っており、「帰国したわけではない」といいつつも、ルーツである日本には「帰る」ということばが使われている。しかしながら、「4文字(姓と名の漢字4文字という意味)」の日本名を意識しつつも、台湾の文化を思い浮かべ、自分が日本人であることに疑問を持つこともある、というどちらか分からないアイデンティティのゆらぎがうかがえる。

A 大学に入学する前、台湾の現地校では両親ともに台湾人のクラスメートがほとんどであり、その中でユカは「自分の立場を維持するために、日本人だって言い聞かせてたかもしれない」(インタビュー③)と振り返っていたが、日本に来てみると「あれ、違う」(インタビュー③)と感じるようになった。また、日本と台湾の二つのルーツを持つユカに対して発せられる暴力的な質問に対して、戸惑う自分を発見したことが語られていた。

Y：一回、バイト先かどっかで、お客さんかな、知らない人に、もう1回今戦争が起きた時に、台湾と日本が戦ったら、どっちにつくって、聞かれて。そこで初めて、戸惑ってることに気付いて。アイデンティティがわからなくなった。普段は全然考えないですけど、聞かれたら考え出す、って感じです。(インタビュー①)

さらにユカは、日本語と中国語を話すバイリンガルであっても、必ずしもその能力を大学で生かせるわけではないことを知る。中国語を生かしてHSK(中国語検定)を取るために中国語の授業を取ろうとしたが、所属学部の専攻で履修指導を受けた教員から中国語ができるのに中国語学習者

向けの授業を取るのはどうかという疑問を呈され、履修を組み直すことになった。以来、A大学で中国語を履修することを「避けて」きたとし、「大きかったですね、その(教員の)発言は。ああ、だめだったんだ、っていうのは。」(インタビュー③)と振り返っている。

また、バイリンガルとして育った人とそうでない人の言語能力との差について、ユカはこのように述べている。

Y : 与えられている時間はでも、平等じゃないと思います。バイリンガルとモノリンガルでは、22年間ずっと日本語で勉強してきた子と、例えば、中国語と日本語と一緒に勉強してきたから、単純計算して、10年、10年、11年、11年で、まあ、この中で学べるものって、差はあるよねっていうのは、感じるというか。自分も、(略) お母さんのように完璧な中国語は話せない、っていうのも最近少しずつ分かってきてるし、だからと言ってお父さんのような、なんだろう、文化に根付いたような発言は出来ていないって感じもします。「俺は日本人だから」って言うけど、私はそれが言えないから。なんか、違うのかなって。(インタビュー③)

しかしユカの両親はそれを否定的に捉えるのではなく「それでいいよと言ってくれるので」(インタビュー③)とし、二言語とも母語話者と同じ程度に話すことを目指さなくても、ユカのアイデンティティを肯定的に受け止めてくれることについて感謝していることがうかがえた。

4.4.3. マレーシアでの研修

A大学の海外研修プログラムに参加したユカは、マレーシアのB大学に派遣され、活動を行うこととなった。このプログラムでは日本文化紹介等の活動も含むが、渡航前のインタビューでは「日本から行っているの、日本人」(インタビュー①)として紹介すると話した。自身の背景については、「接していくと分かると思うんですよね。うーん、難しいですね」(インタビュー①)とし、ここでもやはり自分から積極的にダブルであることを話すことはせず、しかし「接していくと分かる」のではないかと述べ、自分をどのように紹介するかには迷いが見られた。

派遣されたマレーシアのB大学では、中華系マレーシア人の学生がユカを含めたA大学からの派遣学生4名の世話をしてくれた。そこではマレー語の他に中国語が使用されており、ユカにとっては「新鮮っていうか、私の家もそんな感じだったので、なんか、友達ができた、みたいな」(インタビュー②)と親近感を持ったようである。また、世話をしてくれた学生たちは、日本からの学生に気を遣わせないようにと、仲間の間では日本語や英語ではなく、中国語を使用していた。そのため、ユカは他に派遣された3名と同じように日本人として振る舞うことに徹したと語った。以下は筆者とユカのやり取り(一部省略)である。

Y : (B大学の学生の) 言っていることが全部わかったの、英語でも中国語でも、日本語でも。気を遣って中国語を使ってくれるんですけど。それも全部わかっちゃうの。

* : 気を遣って中国語をユカさんのために？

Y : いや、私は中国語を話せない前提でいってて。

(略)

* : 中国語だと、他の人が分からないっていうのも(あって)？

Y：っていうのもあって。申し訳ないというか、私が全部また日本語に通訳しないといけな
いっていうのもあって、言わないようにしてました。

*：じゃあ、今度、ユカさんだけで会った時は、ひょっとしたら、中国語も話すかもしれない
ですか？

Y：いや、中国語を話せることは知らないので、日本語で。

(インタビュー②)

どうして「中国語を話せない前提」でいったのかユカに聞くと、渡航前から「中国語を話さない
でいこう」(インタビュー②)と決めていたとのことであった。これには、派遣された他の3人の
日本人学生が中国語話者でないことや、B大学の日本語学習者には中華系の中国語話者が多かった
ため、日本語や日本文化を紹介するプログラムとして派遣されていることもあり、自分が「中国語
を使ってしまうんじゃないか」(インタビュー③)という思いから、「日本語で貫き通」そう(イン
タビュー②)と考えたようである。

そしてユカは、台湾に住んでいたということは話したものの、B大学の学生が話している中国語
をすべて理解していることを話すことはしなかった。このやり取りからは、後述する国の枠組みや
「帰国子女」等のイメージにとらわれないで「私を見てほしい」(インタビュー③)と感じた場面と
は裏腹に、「日本の大学から派遣された学生」としてアイデンティファイし、B大学の学生と接し
ていたことが分かった。そのため、研修後、もし現地の学生と連絡を取ることがあっても、中国語
を話すことを伝えるのは「いやあ、どうしましょうか、悩むな」(インタビュー③)と話した。

5. まとめ

ここまで、日台「ダブル」の若者のアイデンティティについて、どのように他者との関わりの中
でアイデンティティが形成されてきたかを見てきた。ユカは、日本語や中国語、台湾語、英語など
が話されている多言語環境で育ったが、日本人学校に通っていた時は、「日本人じゃないほう」と
認識し、台湾人の母親がそれを突き付けられる存在であった。台湾の現地校では「日本人」の立場
に立つようになったが、同時に本音を話せると思える友人に出会うことができた。日本の大学に進
学すると「帰国子女」としてラベリングされることに抵抗し、台湾出身であることは積極的に語ら
なくなった。マレーシアでの実習の際、日台「ダブル」の背景やバイリンガルであることは言わ
ず、選択的に「日本人」として接した経験からは、海外の日本語教育の現場において、「(日本から
の)日本語話者＝日本人」という「前提」をユカ自身も内面化し、そのように応じていたことが考
えられる。ユカのアイデンティティの形成過程を図1にまとめた。

一方で、図1の下部にあるように、ユカは「国にとらわれないアイデンティティ」という考えに
出会うことによって、それがユカのアイデンティティにも影響を与えた。そのことがうかがえる語
りを紹介する。

Y：なんか、日本人だからこうこうとか、台湾人だから、こうしないといけない、ていう、狭
い考えにとらわれないで、地域は違えど、同じ人だからっていうふうにとらえてから、結
構楽になって。気持ちとか、整理がついて。今はそういう風に考えています。

(インタビュー②)

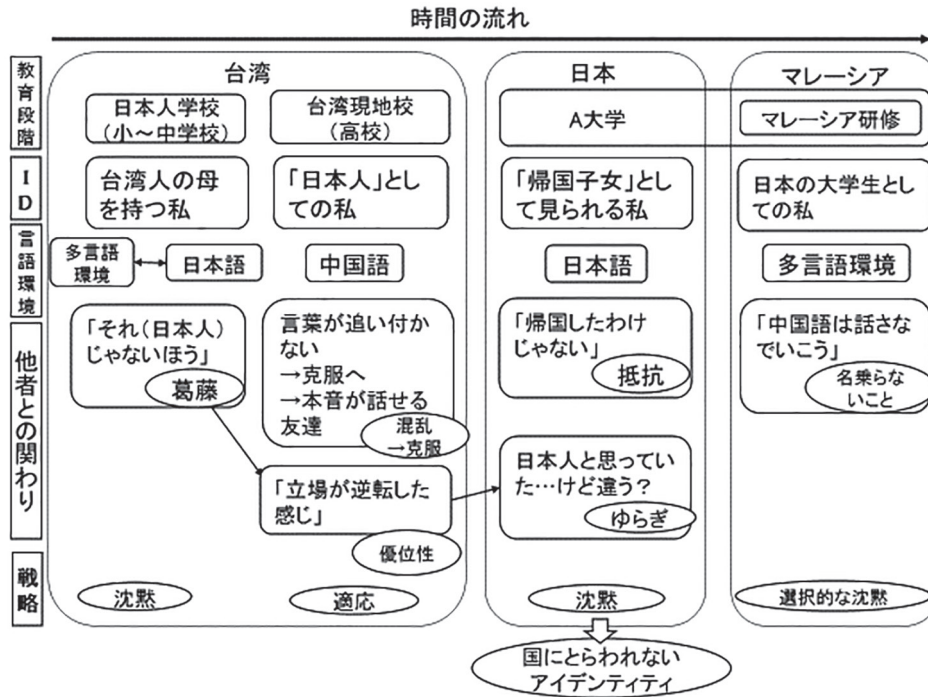


図1 ユカのアイデンティティの形成過程

これは渋谷 (2001) の研究にも見られた、一つの文化の帰属意識にとらわれない「超文化モデル」が現れている一例と捉えることができよう。しかし、台湾出身の日台「ダブル」である背景について「沈黙」することや、マレーシア研修での戦略的な「名乗り」(あるいは名乗らないこと) から見ると、「気持ちの整理」がついたにとどまっている、という見方をするほうがふさわしいと考える。それはすなわち、ユカもまた、「マイノリティ側の出自を明かすこと」のリスクを認識し「あえて名乗らない」という選択をしているのである。

本稿のケースでは、それぞれの環境に合わせてユカは戦略をとってきていることがわかった。そしてその戦略は、主に「沈黙」であったことがわかる。特にマレーシアにおいては、はじめから「中国語を話さない」でいこうと決めていたと語っていることから、日本人学校やA大学入学当初の時よりもさらに戦略的であったといえる。ユカのアイデンティティは、それぞれの環境における他者との関わりもまた、戦略に影響し、アイデンティティを形成してきたといえることができる。

また、ユカのライフストーリーから、不可視化され、名づけられない多様性が、日本の大学や、日本から海外へ派遣される機会では、それが埋もれてしまいがちになり、「日本人」に位置付けられてしまうことが示された。そして、多様な背景を持つ学生を大学が受け入れるには、「日本人」「留学生」「帰国生」といった枠で決めてしまうだけでは対応しきれていない現状も明らかになった。さらに、学生同士の関係では、「帰国生」や「ハーフ」に対するイメージから、自分の背景については「沈黙」せざるを得ない状況があることは、大学における多様性を考えていくうえで重要な課題である。今後は他の日台「ダブル」のケースについても、どのようなアイデンティティ形成がされているかについて研究していくほか、多様な背景を持つ人が自分のことを自然に名乗ることができる場をどのように作っていくことができるかについても考えていきたい。

注

- 1) 中華民国のこと。本稿では一般的によく用いられている「台湾」とする。
- 2) 日台「ダブル」の場合は外見的特徴がマジョリティ（日本人）と違うことによる要因にはなりにくいであろう。ただし、「違わないこと」や「パッシング」による要因を含める場合はこの限りではない。
- 3) ただし、渋谷による研究の対象となった中学生のほとんどは、北米（と少数の欧州・中近東、アジア）が中心であり、無論本研究のケースが当てはまらない部分もある。

引用文献

- Erikson, H. E. (1959). *Identity and lifecycle*. New York: International University Press. (西平直・中島由恵訳 (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房)
- Hall, S. (1996). Introduction: Who needs “identity”? In S. Hall & P. D. Gay (Eds.). *Question of cultural identity* (pp. 1-17). London, Thousand Oaks, & New Delhi: SAGE Publications.
- Polkinghorne, D. E. (1998). *Narrative knowing and the human sciences*. Albany: State University of New York.
- Suárez-Orozco, C. (2004). Formulating identity in a global world. In M. M. Suárez-Orozco & D. B. Qin-Hilliard (Eds.), *Globalization: Culture and education in the new millennium* (pp. 173-202). Ewing, NJ: University of California Press.
- 岩淵功一 (2014) 「<ハーフ>が照らし出す人種混淆の文化政治」岩淵功一編著『<ハーフ>とはだれか—人種混淆・メディア表象・交渉実践』11-26, 青弓社.
- 岡村兵衛 (2016) 『「ハーフ」をめぐる言説—研究者や支援者の著述を中心に』川島浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する—「血」の政治学を超えて』37-67, 東京大学出版会.
- 川上郁雄 (2013) 『「移動する子ども」という記憶と力—ことばとアイデンティティ』くろしお出版.
- 工藤正子 (2016) 「差異の交渉とアイデンティティの構築—日本とパキスタンの国境を超える子供たち」川島浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する—「血」の政治学を超えて』303-331, 東京大学出版会.
- クレスウェル, ジョン, W. 著, 操華子・森岡崇訳 (2007) 『研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法—』日本看護協会出版会.
- 坂本佳鶴恵 (2005) 『アイデンティティの権力—差別を語る主体は成立するか—』新曜社.
- 桜井厚 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 齊藤あずみ (2010) 「トランスナショナルリズムを实践する条件—台湾の日本人学校の事例」筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻共生教育学分野『共生教育学研究』4号, 113-125.
- 佐藤郡衛 (2010) 『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育』明石書店.
- 佐藤郡衛 (2001) 『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり』明石書店.
- 渋谷真樹 (2000) 「マイノリティ集団内部の多様性と力関係—帰国子女教育学級に在籍する『帰国生』らしくない『帰国生』に注目して」お茶の水大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』第3号, 149-162.
- 渋谷真樹 (2001) 『「帰国子女」の位置取りの政治—帰国子女学級の差異のエスノグラフィ』勁草書房.
- 下地ローレンス吉孝 (2018) 『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社.
- 鈴木一代 (2011) 「日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ」『埼玉学園大学紀要—人間学部篇』11, 75-88.
- 鈴木一代 (2014) 「バイカルチュラル環境と文化的アイデンティティ—日独国際児の場合—」『埼玉学園大学紀要—人間学部篇』14, 15-28.
- 竹沢泰子 (2016) 「混血神話の解体と自分らしく生きる権利」川島浩平・竹沢泰子編『人種神話を解体する—「血」の政治学を超えて』3-34, 東京大学出版会
- 武田真子 (2015-2016) 「グローバル人材の議論と日系国際児—2015年台湾調査から」大阪経済法科大学『アジア太平洋研究センター年報』13号, 17-24.
- 土肥豊 (2010) 「台湾の日本人学校の現状と課題」『大阪総合保育大学紀要』第5号, 153-172.
- ビアルケ (當山) 千咲 (2006) 「生徒の異文化体験と親の教育戦略に関する一考察—ある帰国生のライフストーリーの再構成に基づいて」国際基督教大学学報 I-A 『教育研究』48号, 175-184.
- やまだようこ (2007) 『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社.